

私とR.H.ブライス(1898-1964)との出会いは50年以上前に遡ります。確か1968年だったと記憶します。私はグラスゴー大学の学生で、すでに禅と俳句に関心を持っていました。そんな時、ある友人が、ブライスの重要著作 *ZEN IN ENGLISH LITERATURE AND ORIENTAL CLASSICS* を貸してくれました。私は、ワクワクしながらむさぼり読みました。今まで読んだどんな本とも違って、禅を見る全く新しい見方を教えられました。禅が、風変わりな捉えどころがなく異質なのではなく、近づきやすく万人に通ずるものであることを教えられたのです。ブライスがいう「禅の精神」が英文学の最も優れた部分にみなぎっていることが、シェイクスピアやワーズワスや欽定訳聖書やステイヴンソン(もちろんスコットランド出身^{*)})やルイス・キャロル(キャロル好みの逆説とシュールなユーモアと共に)をふんだんに引用しつつ示されていました。

その後、自分はブライスの *HAIKU* (『俳句』全四巻)がほしくてたまらなくなりました。これは、春夏秋冬の四季を各巻のテーマにしたものです²⁾。 *HAIKU* には、ブライスによる各句の英訳とそれを更に高める魅力的な注釈がついていました。ロンドンに「コンペンディウム」という名の書店があり、四巻全部が揃っていました。当時自分はグラスゴーからヒッチハイクでロンドンまで行き、一巻ずつ購入してはリュックサックに注意深く入れ、あたかも聖典でも取り扱うかのように大事に大事にグラスゴーまで持ち帰ったのです。ブライスによるこれらの書物が自分に扉を開いてくれたと言っても過言ではありません。ブライスの書物は、私の著作活動にも精神生活にも大きな影響を与え、心からの感化を及ぼしました。私は、俳句をつくるようになり、後には短編や長編の小説の執筆や出版をするようになりましたが、それらは皆、日常性にしっかり立脚すると同時に、根幹において精神性を強く有するものになりました(私は、すでにスリ・チンモイ師の指導のもとで瞑想の修行に真剣に取り組み始めておりました)。

自分は、ブライスがどのような人生を送ってきたかの詳細について殆ど知りませんが、1990年代にデイヴィッド・コップ編の *The Genius of Haiku* と題するブライスの小文集を手にする機会を得て、その序文から彼の数奇な生涯について少しだけですが知ることができました。そして、こんな生涯が本当にあり得るのか、と感嘆しました。

ブライスは1898年に生まれ、第1次大戦中に成人し召集されますが、ジョージ・バーナード・ショーなどの思想家の影響を受けて、すでに平和主義者(かつ肉食主義者)になっていました。戦争参加を拒んだため、良心的兵役拒否者として大戦中、収監されました。一方、第2次大戦中、ブライスは「敵性外国人」として、神戸で収容所生活をおくりす。



鈴木大拙(前列中央)らとブライス(右)鎌倉円覚寺山内にて 1946年(昭21)

どちらの大戦中においても囚われの生活をおくったのは皮肉なめぐり合わせでした。

両大戦間の年月についても見てみましょう。ロンドン大学在学中に、最初の妻となるアニーと知り合います。卒業後の1924年、当時日本の「保護領」であった朝鮮に移り、英語を教えますが、その間、鈴木大拙(1870-



ブライス一家、愛犬ガビと 学習院官舎庭にて 1957年(昭32)1月

1966)の書物を通じて禅への関心を高めます。アニーとの結婚生活には終止符が打たれ、その後、彼は富子という日本人女性と、再婚します。朝鮮での生活が難しくなり、1940年に日本本土に移り、鈴木大拙と出会い、金沢で教鞭をとり、安倍能成や新木正之介らが保証人となって日本国籍を申請しますが、戦争が勃発し、神戸の収容所に入れられます。自由を失うのは苦痛ではありませんが、持ち前の粘り強さで、収容所生活を最大限に活用します。同じ収容所にいた禅に熱心な米国人ロバート・エイトケンと親しくなり、僧堂での生活にも擬すべき規律のもとに生活します。ブライスが収容中であつたにもかかわらず、著書 *ZEN IN ENGLISH LITERATURE* (『禅と英文学』³⁾)が東京の北星堂から出版されたことは、注目に値します(後に、ブライスは、「北星堂は出版の約束を守ってくれたのである」と述べています)。収容所にいる間に、ブライスは、さらに *HAIKU* 全四巻のうちの第一巻を執筆しますが、これが出版されたのは戦争が終わってからでした。

ブライスの人生が劇的な展開を見せるのは戦後のことです。ブライスは、心の師・鈴木大拙、そして山梨勝之進(1877-1967)とのつながりを一層強めます。山梨は学習院長として、ブライスに学習院での教職を用意してくれました。ブライスは学習院で英語を教えるだけでなく、皇太子明仁殿下(上皇陛下)の個人教授も務めました。彼は、皇室とマッカーサー元帥率いるGHQとの仲介役になり、双方へ思慮深い助言を提供しました。また、学習院が廃校をまぬかれるよう要路を説得することに成功しました。また、昭和天皇の「人間宣言」の発出にも尽力しました。この宣言が発出されたことで、GHQは、安心を深めました。ブライスの努力が脚光を浴びることは



山梨勝之進とブライス 学習院官舎にて 1952年(昭27)頃

殆どありませんでしたが、きわめて重要な役割を果たしたことで、山梨院長も昭和天皇御自身も彼の業績に謝意を表明したと言われています。

ブライスは、学習院で教えるかわら、精力的な執筆活動を続けます。しだいに彼の文筆は世界的な影響を及ぼしていきます。特にビート世代の作家たちには多大な影響を与えました。アレン・ギンズバーグ、ジャック・ケルアック、ゲーリー・スナイダーらは、ブライスに負うところが大きいことを認めています。J.D.サリンジャーはブライスと書簡を交換したほか、小説の一つでブライスを引用しています。リチャード・ライトは、ブライスの影響で俳句を作るようになりました。

ブライスの生涯に基づいた小説を書くという構想が私の脳裏に浮かんだのは、ほぼ10年前のことです。以前書いた *Night Boat* という小説では、白隠慧鶴禅師の生涯を自伝の形で描きましたが、今回もこの手法を採用しました。 *Mister*

1966)の書物を通じて禅への関心を高めます。アニーとの結婚生活には終止符が打たれ、その後、彼は富子という日本人女性と、再婚します。朝鮮での生活が難しくなり、1940年に日本本土に移り、鈴木大拙と出会い、金沢で教鞭をとり、安倍能成や新木正之介らが保証人となって日本国籍を申請しますが、戦争が勃発し、神戸の収容所に入れられます。自由を失うのは苦痛ではありませんが、持ち前の粘り強さで、収容所生活を最大限に活用します。同じ収容所にいた禅に熱心な米国人ロバート・エイトケンと親しくなり、僧堂での生活にも擬すべき規律のもとに生活します。ブライスが収容中であつたにもかかわらず、著書 *ZEN IN ENGLISH LITERATURE* (『禅と英文学』³⁾)が東京の北星堂から出版されたことは、注目に値します(後に、ブライスは、「北星堂は出版の約束を守ってくれたのである」と述べています)。収容所にいる間に、ブライスは、さらに *HAIKU* 全四巻のうちの第一巻を執筆しますが、これが出版されたのは戦争が終わってからでした。



横田基地内で近代極東史のクラスに招かれたブライス 1949年(昭24)2月14日

Timeless Blyth (時を超えたブライス先生)という題名は、「ブライス」という名前に「不来子」という漢字を当てるといふ鈴木大拙による一種の言葉遊びから発案したのですが、この本の冒頭において、ブライスが、1964年の東京における死の床で一生涯を振り返る場面を想像してみました。自分は、ブライスの書いたものを沢山読んできたおかげか、彼の声を聞くことが出来たと感じています。冒頭の何章かは、その声に導かれて書いたものです。自分の想像の中に、戦争不参加の信念ゆえに投獄された青年ブライスが現われました。第2次大戦後のブライスの仕事についても、彼の著作とそれがもたらした影響についても、彼の晩年の日々についても、彼の声に耳を傾けながら筆をすすめました。

本を書くための調査はまず、岐阜の吉村侑久代先生と京都のノーマン・ワデル先生というブライスについての豊富な知識と独自の観点を有する二人の学者との接触から始まりました。お二人とも、とても親身になって私を助けてくれました。しかし、ブライスの一生の中で、まだ埋められるべき空白が沢山残っていました。——朝鮮在任時代、2回にわたる結婚、家庭生活などです。自分は、いわば自ら書き始めた文章に追い込まれた形になってしまいました。書きかけの原稿をかたわらに置き、じっと時がくるのを待ちました。

すると、いつもの通り、偶然の出会いが扉を開け、前進を可能にしてくれました。グラスゴー大学の学究である矢崎早枝子さんが、ご自分が準備していたシンポジウムへの出席を打診するため連絡を取ってくれたのです。自分は「残念ながらシンポジウムには出られないのだが…」とお断りしつつ、執筆中の本について話しました。矢崎さんは「東京の学習院にブライスゆかりの品々があるのはご存知ですよ？」と尋ねてきました。自分は「えっ、本当ですか!」と驚きました。

それを受け、早枝子さんは、学習院大学史料館の大川基子さんと富田ゆりさんを紹介してくださり、直接連絡できるようにしてくれました。幸い東京に行くための資金も確保できました。東京では、学習院大学史料館の方々が、自分を温かくそして優しく迎えてくれ、ブライスに関する所蔵資料を見せてくれました。自分は圧倒されました。それが宝の山だったからです。手書きの原稿や書簡の数々、ノート類、ありとあらゆるチラシの類などがありました。写真や葉書や、走り書き用の手帳もありました。試験用紙の裏に記された随筆の下書きもありました。

かつて1960年代に読んだブライスの初期の書物のオリジナル原稿(手書きやタイプで何度か書き直したもの)もあり

著者 Alan Spence (アラン・スペンス)

詩人、小説家、劇作家。アバディーン大学名誉教授。スコットランド・グラスゴー生まれ。グラスゴー大学で英文学と哲学を学び20代から瞑想を実践し、東洋哲学、特に禅に関心を持つ。数々の英語俳句集を発表するとともに、トーマス・ブレイク・グラバーを題材とした *The Pure Land*、白隠禅師を題材とした *Night Boat* などの小説を出版。2017年、エディンバラ市・桂冠詩人。2018年、日英文化交流に対する功績により旭日小授章を受章。執筆活動のかたわらエディンバラで良書を扱う書店も営む。



訳・監修 松永 大介 (まつなが だいすけ)

大阪学院大学教授。1979年東京大学卒業。在学中、米国イリノイ大学に留学。外務省に入省後、在外研修を機会としてスタンフォード大学にて経営学修士(MBA)を取得。歴代総理大臣や外務大臣の英語通訳を務めたのち、宮内庁御用掛として英語通訳。在ベトナム大使館公使、在香港首席領事、在ドバイ総領事、在エディンバラ総領事、在エチオピア特命全權大使を歴任。学生時代から禅に親しむ。アラン・スペンス氏との親交は、エディンバラ在勤時代から。

